

## 女性専用車両がもたらす幸せとは？

荻原 知沙子・中森 葉月

東京など日本における大都市では、朝、電車が最も混む時間帯に女性だけが乗ることのできる車両が存在する。そこには、ピンクのステッカーが窓に貼られ、”women only”と主張されている。

日本ではじめて女性専用車両が登場したのは、1912年。男性と女性が同じ車両に乗るのは許されるべきではないとの社会的価値観により設置された。戦後には、女性専用車両は男女差別につながるのではという考えから、一度はなくなっただものの、1980年代には電車内における痴漢が社会問題となり、再び設置されるようになった。鉄道会社は、あまりにも電車が混んだ際、女性や子どもを守るという意味も込めて女性専用車両を再開した。痴漢冤罪を避けたいと考えている男性から歓迎されたことも、設置の拡大に拍車をかけた。このことにより、妊婦もより安心して電車にのることが可能となった。

一方で女性専用車両の存在に疑問を抱く人々もいる。関東と関西に拠点を置き活動する「女性専用車両に反対する会」はその一例である。

「『体の不自由な人』だから女性専用車両に乗れるはずなのに、実際に乗れば他の客から追い出される」参加者の一人の男性は言う。女性専用車両と大きく書かれたピンクのシールには、「小学生以下の男の子、お体の不自由な方とその介助者の男性もご利用いただけます」と書かれている。だが、実際には乗客同士のトラブルは絶えない。小田急電鉄では、そういったトラブルが起こればすぐに車掌が駆けつけられるよう、設置を最後方車両にするなどの対策をとっている。

また、同性愛者の女性が、彼女のボーイッシュな外見から女性客に追い出されるという例もある。男女両者の要望により設置されている女性専用車両だが、実はこうした様々な問題に対応しきれていない。

日本に限らず、女性専用車両はアジア、中東、ヨーロッパ、南米の国々も多岐にわたる理由で導入している。中東諸国では宗教的理由で設置されている。イギリスではタクシーでの暴行事件が相次いだため、女性運転手によるピンク色の女性専用タクシーが走っている。反対に、アメリカのニューヨーク州のように女性専用車両に否定的というところもある。ニューヨーカーは、市民間を

分ける女性専用車両のアイデアから、人種差別の歴史を思い出し、設置を拒否したという。

もちろん女性専用車両の存在によって、助けられている人も多くいるだろう。だが性別も障害も人種も、見た目だけでは分かり得ないため様々な問題を引き起こしうる。私たちは、周囲の人がどのような人なのか、見た目だけで安易に判断してしまうことの危険性に気づく必要があるのである。

### 【編集後記】

あるシステムが一度社会にとけ込むと、人々はそのことについて疑問に思うことをやめてしまうように思います。原発の安全神話もその一つです。しかし、ここでもう一度考えたいのは、本当にそれらが人々の生活に幸せをもたらしているのか？ということです。読者の皆様と一緒に、様々な事柄についてアンテナをはり考え続けることができたなら、嬉しく思います。

荻原 知沙子

私は、まったくもって女性専用車両に反対なわけではありません。ただ、毎日女性専用車両を利用している一乗客としてふと疑問に思ったのです。「女性」って誰のことだろう。この記事を読んで、性別に限らず今ある当たり前の前で、少し立ち止まっていたら幸いです。

中森 葉月